

大学院のゼミの談話におけるスピーチレベルのシフト

学籍番号 S11 (漢字表記)

要旨

大学院のゼミの談話におけるスピーチレベルは参加者に公の場と認識されているため、参加者が丁寧型で発話することが多い。しかし、次の5つのパターンで i 途中で切れる、ii 談話構造の変化、iii 上昇イントネーション、iv 省略表現、v 体言止め、丁寧型から普通型へ変化する発話も見られ、そのスピーチレベルシフトの機能を分析した。さらに、母語話者は非母語話者より共話の数が多いことがわかった。

キーワード：スピーチレベル、丁寧型、普通型、共話

1. はじめに

この論文の目的は、大学院のゼミの談話におけるスピーチレベルが、どのような条件の時にどのようにシフトするのか、そしてそのシフトが生起することによりどのような効果、働きがあるのかを、明らかにすることである。

スピーチレベルシフトとは文体が変化することを言う。良好な人間関係を築き、円滑な社会関係を営もうとする時、言葉遣いは重要な要素である。日本語では「ですます体(丁寧型)」か、そうでない文体(普通型)かの選択、すなわちスピーチレベルの選択は、重要な鍵を握る。母語話者は、意識的あるいは無意識にスピーチレベルをシフトしながら、様々なメッセージを伝える。

それに対し、非母語話者はスピーチレベルに対する認識が乏しい。なぜなら、日本語教育における丁寧型と普通型の扱いには、最初は丁寧型から教えるのが一般である。普通型は友だち言葉として導入されるのが一般的であり、多くの場合は友だちや家族との会話で使われていると説明される程度である。さらに、尊敬語と謙譲語は目上の人との会話で使われると説明される。すなわち、非母語話者は丁寧型と普通体の使い分けは「場面」によって使い分けると認識していることが多いからである。そのため、同じ場面で非母語話者のスピーチレベルのシフトが少ないとみられる。

この研究により、大学院のゼミの談話に重点を置き、どのような条件の時にどのようにスピーチレベルがシフトするのかを明らかにし、日本語学習者がゼミ等比較的正式の談話に参加する際に、より円滑なコミュニケーションができるようになればと考えている。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

スピーチレベルのシフトについて扱った研究には、次のように挙げられる。

第一、「学生の討論におけるスピーチレベルのシフト」(杉山 2000)の研究によると、

丁寧体と普通体の選択には六つの要因、①場面の变化、②立場／役割の変化、③談話管理、④心理的な変化、⑤発話を聞かせる相手の変化、⑥談話構造の変化、に関わることが明らかにされている。

第二、「日本語の講演の談話におけるスピーチレベルシフトの形態と機能」(谷口 2004)の研究は談話展開の標識に重点を置き、次の 6 つの機能を果たす際、①引用を示す、②繰り返しによる強調、③結論を示す、④話し手の理解や感想などを示す、⑤列举(具体例など)を示す、⑥情景描写(想像、回想など)、スピーチレベルシフトをする。

第三、「ポライトネスに応じた言語形式と人間関係の認知-中国人ならびに台湾人留学生と日本人母語話者との比較の視点から」(山口)の研究によると、中国人・台湾人被調査者は、「親疎関係」や、発話行為の「内容の軽重」がスピーチレベルの選択を行う際の重要な判断基準になり、同じグループに属するか否かを表す「ウチ・ソト」がスピーチレベルの選択基準になるということが明らかになっている。

第四、「日本語コミュニケーション-共話について」(黒崎)によると、共話は日本語会話で顕著に見られる会話形態の一つであり、それは発話している人の文はまだ完結していないところ、聞き手がその文を続けて完結させることであるとしている。

第五、「大学院のゼミ談話で見られる日本語母語話者の『対話』と『共話』の使い分け」(嶺川 2001)では、共通の理解、見解の関係、話者の距離などの影響で、対話か共話かを選択する。「対話」と「共話」もゼミ談話で円滑に進むに重要なインターアクションである。

しかし、大学院のゼミの談話を対象に、スピーチレベルのシフトという観点から扱った研究はない。そこで、大学院のゼミの談話でどのような条件の時にスピーチレベルはどのようにシフトするのかを、明らかにしたい。

その結果で、日本語教育における丁寧型と普通体に関する説明の仕方を改めて考えていければと思っている。また、非母語話者が母語話者を中心とするゼミにより溶け込むに留意すべき要因をさらに研究をしていくことを目指す。

3. 研究の資料と分析の方法

研究の資料は、2015年9月に、神奈川県三浦半島のホテルで行われた都内の大学院の某ゼミナールの40分程度の談話二つ(AとBで略称する)を文字化したものである。二つの談話とも、指導者を含め8人がおり、その中日本語母語話者と非日本語母語話者両方がいる。

内容構成は、最初に発表者が論文を約20分程度で発表し、その後ゼミナール参加者が議論し、最後に指導者がコメントするという形である。

ゼミでの談話はすべての発話者が丁寧語を主に使っていた。杉山の分類では、①場面の变化を公の場と認識していると、⑤発話を聞かせる相手の变化をメンバー全員と認識していると考えられる。そのため、これから何故普通体に変化したのかを注目し、

分析していきたい。

なお、本研究において、「です、ます」で終わる文を丁寧型と分類し、「常体、だ体」で終わる文を普通型と分類する。また、共話と見られるところにおいては、ターンをとった人の文末で分類する。

4. 分析の結果

ゼミという場面は参加者全員が公の場として認識しているため、全員は基本的に丁寧語で発話している。そのため、どういう場面でどのような理由で発話が丁寧語から変化したのかについて注目して分析して行く。

研究資料を談話対象の交代によって次の4つの談話に分けることができる。

<談話1> 発表者Aは修士2年の日本人女性、質問者A1はOGの日本人女性である。丁寧語から変化せずに発表者Aの発表が終わり、質問に入るところである。なお、質問者A1は先輩にもかかわらず、発話は基本的に丁寧型をとっている。

<談話2> ゼミ生の議論が終え、先生がコメントし始めるところである。発話者は発表者Aと、指導者である先生Aと、博士1年の女子留学生の質問者A4がいる。

<談話3> 発表者Bは修士2年の女子留学生、質問者B1は博士3年の女子留学生である。発表者の発表が終わり、質問者B1が質問のターンをとり、丁寧語で発話し始めた。

<談話4> 発表者Bと博士3年の女子留学生の談話である。

4つの談話を分析し、次の5つのパターン i 途中で切れる、ii 談話構造の変化、iii 上昇イントネーション、iv 省略表現、v 体言止め、で分類した。その数は次のようになる。

| | 談話1 | 談話2 | 談話3 | 談話4 |
|----------------|-----|-----|-----|-----|
| i 途中で切れる | 13 | 5 | 5 | 7 |
| ii 談話構造の変化 | 3 | 18 | 2 | 0 |
| iii 上昇イントネーション | 6 | 6 | 4 | 4 |
| iv 省略表現 | 6 | 15 | 3 | 9 |
| v 体言止め | 0 | 4 | 1 | 7 |

パターン i 途中で切れるのが多くのは、共話表現という発話者の発話の途中でターンが取られ、一つの文が二人で完成させることであり、日本語会話で顕著に見られる。この4つの例では、特に例1に多く見られる。それは話者二人が日本語母語話者であるためと考えられる。例2は先生のコメントが主になるため、対話が多く、共話が少なくなる。例3と4で共話が少ない理由は話者が留学生と考え、ゼミにおける談話をさらに円滑にするには共話に注目すべきだと思う。

パターン ii 談話構造の変化は特に例2が多い。それは先生が一人で対話（ターンを

持ち続け、比較的長い発言をする) しているので、谷口の研究での談話展開を標識するためのスピーチレベルシフト多くなると考えられる。また、発話の長さにかかわらず、説明を深めるに使われる「という、っていう」を使う際、「という、っていう」の普通型で終わることが多い。

パターンiii上昇イントネーションはいわゆる確認表現と問いかけ表現としてよく使われる。

パターンiv省略表現は、一般の談話で省略しても常識や経験で考えればわかるという考え方と違い、内容の補足でよく使われる。すなわち、先行の文でも言ったので、省略しても良いという考え方である。これも対話表現でよく使われるパターンと考えられる。

パターンv体言止めは文末がないため、丁寧型でもない、普通型でもないので、発話者がどちらを取らないといけないこと避けることができる。確認表現や固有名詞を提示する際に使われている。

5. 考察

今回の研究は丁寧型からの変化を注目して分析してきたが、談話3中に一つ普通型から丁寧型へ変化する興味深いところをご覧にいただきたい。質問者B1は最初に丁寧型で発話したが、二回目の発話から普通型に変えた。しかし、自分の意見をまとめて言う際、再び丁寧型に変えた。また、二回目のターンを取った時も丁寧型で発話し、その後に普通型で発話し続けた。

質問者B1：(間：12秒) はい。

発表者B：どうぞ。

質問者B1：えーと、今のその命名についての話なんですけど。ま、たぶんその、因子分析で、その一、出た結果をもとに、命名は、その、研究者自身が、本人が命名していいと思うんですけど、なーんとなく、第一因子のところ、日本語力の不足というふうを書いてあるんですけど、項目、を讀んでいくと、なんか書き言葉が(発表者B：はい) 書けているかとか学術的な言葉とか、言葉を言い換えるとか(発表者B：はい) 表現とか(発表者B：はい)、日本語力をもう少し具体的に、見ていくと、なんかこう、表現、文章に対する、その表現力(i)

発表者B：表現の産出(i)

質問者B1：とか(発表者B：とか)、うーん、なんていうんですかね。も、もう少したぶん具体的(発表者B：具体的な命名)な命名をした方が(発表者B：はい) もうちょっと分かりやすいかなていう。(ii)

発表者B：分かりました。

質問者B1：文法なのか、表現なのか(発表者B：はい)、うん、表記なのかとか、そういう、ので。でも、今現段階ってその57部↑。(iii)

発表者B：そうですね。

質問者B 1：で、さらにこれから、ま、回収して（発表者B：はい）いく一、と
ところで、また、その、因子の項目（発表者B：そう）とかも変わってくる一、(i)

発表者B：変わってきます。

質問者B 1：し、たぶん名前も、その、ちょっとまた、集まった、その項目によ
って（発表者B：はい）違ってくると思うんですけど（発表者B：はい）。確かに、
その第三因子の17、20番と17番はちょっとこう、違うものが入っている (i)

発表者B：ような感じがしてますね。

質問者B 1：と思うので（発表者B：はい）。これに関しても、なんとなく上の第
二因子に近いていう。(ii)

発表者B：そうですね。第二因子にも第三因子にも（質問者B 1：うん）高い値
を示しているので、(iv)

質問者B 1：そうですね。

発表者B：そうですね。

質問者B 1：うん、なのでまあ（発表者B：はい）、ちゃんと、なんていうんです
かね、データを収集して、それデータが固まってから（発表者B：はい）、分析を
かけてどのような結果が出るのか（発表者B：はい）見ていった方がいいか
と思います。

*前置きの確認表現は普通体がよく出ているが、自分の意見を言う際、発話を聞
かせる相手の変化をメンバー全員と認識しているため、丁寧語で発話すると考え
られる。

発表者B：（間：2秒）ありがとうございますます。

質問者B 1：（間：3秒）ちなみにですけど、因子分析の次に、どういう分析で、
どういう考察をしていこうと思ってますか↑。

*二回目のターンを取る。談話管理で発話の始まるを示すため丁寧語で発話し、
丁寧語で質問する。

発表者B：これからは、あの一、特に、あの一、あとは、平均値を求めて、次に
あの一、T検定と分散分析をやりたいと思います。

質問者B 1：それはどういうグループとどういうグループ↑。(iii)

*二回目の質問で普通体に変えた

発表者B：どういう……（中略）なにか分析したいなと思っています。

質問者B 1：でもそうになると、例えばですけど、T検定だと、この2つのグループ
を（発表者B：そうですね）比べる（発表者B：はい）のには100名ですと、ま、
50とか、60、40というふうに（発表者B：はい）、まあ、(i)

発表者B：男性と女性とか (iv)

質問者B 1：そうですね。ある程度（発表者B：はい）結果は出やすいと思う（発

発表者B：はい) んですけど、分散分析だと、3 グループ 4 グループ (発表者B：3 グループ 4 グループ)。今の学年ごとにだと 1 年 2 年 3 年 4 年だと (発表者B：たぶん、まあ)、たぶん 1[ひと]グループ、今のデータだと学部 2 年生だと 8 名。(v)

発表者B：今だとちょっと足りないんですけども、… (中略) 予想しています。

質問者B 1：(間：2 秒) この属性の中に、その、日本語のレポート書いたことある人とならない人 という↑。(iii)

発表者B：あ、… (中略) そもそもそういう目的でした。

質問者B 1：(間：5 秒) あとは、個人的に知りたい、(発表者B：はい) のは、その、学部で文系と理系によって違うので、書くレポートも内容違って来るから、そこに (発表者B：はい) 対して、ま、理系の人と文系の人が抱えている不安は どちらがうのか↑。(iii)

発表者B：まだ具体的にあまり分析になっていないんですが

質問者B 1：こういうのもなんか、まあ、たぶん検定だけじゃなくて、あの一、その後のそのフォローアップインタビューで (発表者B：そうですね)、もう少し具体的な話 (発表者B：はい) が、あの、直接インタビューして聞いた方が、たぶん。(iv)

発表者B：ありがとうございます。

質問者B 2：(間：8 秒) すいません。

なお、節連鎖表現でもスピーチレベル示しているが、本研究では計算しないことにしたが、節連鎖表現でのスピーチレベルシフトも発話者のスタンスを示している。特に、発話する際の最初の文に丁寧型の節連鎖表現が多く見られる。

確かにスピーチレベルは日本語で話す相手との関係性、場面、話し手の心理などの変化を表すものであるが、大学院のゼミにおけるスピーチレベルのシフトの重要性は改めて考えるべきものである。もしスピーチレベルをシフトしない場合、あるいは、スピーチレベルのシフトの意味合いを理解できない場合、どういう支障が出てくるのかも考えつつ研究していきたい。

6. まとめ

大学院のゼミの談話で参加者が丁寧型で発話することが多いのは、ゼミは公の場と認識しているからである。しかし、丁寧型以外の文型の発話も見られ、それを次の 5 つのパターンで i 途中で切れる、ii 談話構造の変化、iii 上昇イントネーション、iv 省略表現、v 体言止め、分類することができる。それぞれ共話、談話構造の変化、問いかけ、内容の補足などの機能を持っている。さらに、母語話者は非母語話者より共話の数が多いことがわかり、これからの日本語教育にゼミのような公の談話に関する授業内容充実することを期待している。

7. 参考文献

杉山 (2000) 「学生の討論におけるスピーチレベルのシフト」 別科論集 (2), 81-102

谷口 (2004) 「日本語の講演の談話におけるスピーチレベルシフトの形態と機能」
Waseda journal of Japanese applied linguistics 4, 117-129

山口 (2002) 「ポライトネスに応じた言語形式と人間関係の認知-中国人ならびに台湾人留学生と日本人母語話者との比較の視点から」*The Japanese journal of language in society* 5(1), 75-84,

黒崎 (1995) 「日本語コミュニケーション-共話について」 *Sonoda Women's College studies* 30(I), 45-60

嶺川 (2001) 「大学院のゼミ談話で見られる日本語母語話者の『対話』と『共話』の使い分け」 *The Japanese journal of language in society* 3(2), 39-51